観想考

『描く』…海・空・岩との語らい・・・・仲村元秀

青い海と空、巨大な岩々に惹かれ二十年来伊豆を描き続けています。伊豆と言っても観光地として洗練されている東海岸ではなく、鉄道の便がないため未だあまり開発の手が伸びていない西海岸が主です。

まず車で海岸線沿いを走ります。対象になりそうな場所を見つけ下車。こちらの角度から、あちらの角度からと構図を練ります。未熟者のため他者の言葉の影響を受け易いので人が寄りつかない所を選定します。ロケハンを何度か繰り返して、自分の意図した場所に辿り着いても、すぐには筆を取りません。三十分程ぼうっと対象を眺め、昨晩飲んだ旨い酒を思い出しながら、目だけではなく心の中に、その景色を浸透させます。それからおもむろに筆を手にし、小さいスケッチを２点ぐらい描いてから大作に入ります。意外にも小品の方が評判が良いこともあります。下手だと思ってもその日で作品は完成とし、後から手を入れない。絵は「日記」。それが私のこだわり。下手も一つの味、その日限りの発見だと思っています。

従来は巨大な岩々に波がぶつかって砕ける雄々しい風景が好みでしたが、ある時全く異なった感覚に気付きました。海・空・岩が穏やかな日には穏やかに、荒れた日には荒れ狂って互いに語らってるように感じられたのです。それまでは対象と対峙していた自分が、いつの間にか彼らの語らいの輪の中に入り込んで一緒に語らっているようです。二十年来訪れて来た褒美として、彼らの語らいの場に招き入れてもらえるようになったのでしょうか。「描く」とは対象を写し取ることではなく、自然と同化した自分自身の投影なのだとの思いを年々強くしています。

『年々歳々花相似たり　歳々年々人同じからず』と唐の詩人劉希夷が言っているように、海も空も岩も毎年変わらない姿を見せますが、人間は年々歳をとります。しかしながら単に歳をとるのではなく見る目が変化してそれまで見過ごしていたり、あるいは目に留まらなかったものを新たに発見するのかなぁと。彼らとの対話を楽しみながら出来るだけ長く伊豆を訪れたいと思っています。

副都心の黄落・・・・伊藤誠三

新宿副都心地区は私の長年の仕事場となっているが，30 余年の年月を経て西新宿 6 丁目地区の開発工事も終盤になり，まとまりがついたようだ．淀橋浄水場時代の景色を思い出すと，隔世の感がある．

新しい区画ができはじめた頃の街路樹も今や見上げる大木になって，新宿中央公園の林と共に立派なグリーンベルトとなった．春先になると，欅，銀杏等の武蔵野の樹木が一斉に芽吹き，新緑が出揃うと鬱蒼たる木立となって蝉時雨を包み込む. やがて緑色衰えて, 黄落を迎え, ほぼ黄色一色に覆われる．今は 11 月の終わり，枯葉がしきりに舞っている．中央公園はホームレスのバラック群に一部，占拠されていた事もあったが，それも今は一掃された．清掃も良く行われ，花壇には季節毎に草花も植え替えられ，手入れも充分に行き届いている．中央に設けられた滝はいつも気持ちの良い水音を聞かせてくれている．桜の頃は近隣のサラリーマンで賑わい，高層住宅群も増えた所為か，子供連れ，犬の散歩と家族の散策も多く見られる．少し前までの汚く，暗かった頃のイメージも殆ど消えてきた.

私が初めてロンドンを訪れたのはもう 30 年も前のことだが，ハイドパークなどの緑豊かで清潔な都市公園を羨望をもって見ていた事を思い出す．その後，パリやウイーン等，国際的大都市の公園も訪れたが，それらに比しても，この辺りも緑の美しい都心の一つに数えられるのではあるまいか.

都市の住みやすさランキングというのが公表された事がある．確か東京はパリと同じ 16 位と言うことだったと記憶する．何を指標としているのか不明だが，住居費とか，交通費とかの利便性のみならず，環境の満足度のような指標も必要だろう．都市生活者にとっては，近くに快適な公園があり，そこでゆっくり時を過ごし，日常のストレスを癒す心のゆとりがなにより必要であり，そういう人達の訪れによってこそ良い公園が造られてゆくのだと思う.